

関係機関や地域との連携・協働

～広域的に取り組むコムギ赤さび病防除対策～

対象：JAいわみざわ、JAびばい、JAながぬま、岩見沢市農業試験圃

1 活動の背景

当地区の秋まき小麦栽培で最も重要視されている病害は、コムギ赤さび病である。JAいわみざわ管内では7年前からコムギ赤さび病が問題となっており防除対策が急務である。

岩見沢市農業試験圃（以下「農業試験圃」）では新剤効果と散布時期検討、JAいわみざわ豆麦輪作研究会（以下「研究会」）員およびJAびばい農業者ほ場で新防除体系実用化検討をすすめた。

また、JAながぬまでもコムギ赤さび病が問題となっている。



写真1 赤さび病の孢子



写真2 赤さび病の被害

2 活動の経過

活動年次 令和2～3年

(1) 試験と実用化検討

農業試験圃の試験で得られた結果は、翌年に研究会員のほ場で実用化を検討した。

(2) データの活用

JAいわみざわとJAびばいの協力を得て、JAながぬま小麦採種組合に実用化検討のデータを提供した。

(3) 農業者の変化把握

JAいわみざわと連携し、栽培履歴を用いて新防除体系の導入・普及状況を確認した。

3 成果の具体的内容

(1) 状況把握と情報発信

農業試験圃と連携したことで、従来の防除体系が構築された背景や近年の病害発生傾向を関係機関で共有することができた。また、農業試験圃からSNSで情報を発信し、農業者の反応や意見をタイムリーに把握することができた。その結果、地域ニーズを反映した計画の作成に繋がった。

視察受け入れを積極的に行うことで、情報発信だけでなく、他地域の情報も入手することができた。

(2) 役割分担

農業試験圃・JA・農薬メーカー・普及センターが合同で打合せ・活動することで、相互理解が深まり、それぞれの得意分野を活かせる役割を担うことができた。

また、研究会役員の個別巡回により役員の問題解決への意識の醸成に繋がった。コロナ禍で



写真3 メーカーによる薬剤散布

の技術普及は不安であったが、研究会役員や試験圃からの情報発信が技術導入を加速化した。

試験計画と成績の作成は、農研本部技術普及室および中央農業試験場予察診断グループから指導を受けることができた（支援要請）。

(3) 行動の共有

試験と実用化検討のほ場設置や調査は関係機関が合同で実施したため、どの機関も農業者に対して同じ情報を提供することができた。

(4) 農業者の変化把握

JAいわみざわの協力により、栽培履歴から新防除体系に取り組む農業者の数を確認することができ、翌年の指導対象を絞り込むことができた。

(5) 広域的な情報共有

JAながめま小麦採種組合の審査は、普及センター本所・支所職員が同時に組合員やJA職員の声を聞く機会となり、本所管内での取り組み成果を南西部支所管轄の農業者が時期を逸せずに活用することができた。



写真4 JA・農業者との合同調査

表1 防除体系の変更内容

防除時期	従来防除体系		新防除体系	
	基幹	臨機	基幹	臨機
止葉期（0回目）	A剤（Qol）		E剤（SDHI）	
赤かび病1回目	B剤（DMI）		B剤（DMI）	F剤（他）
赤かび病2回目	C剤（他）	A剤（Qol）	C剤（他）	A剤（Qol）
赤かび病3回目	B剤（DMI）		B剤（DMI）	F剤（他）
赤かび病4回目	D剤（DMI）			

* 臨機のA剤は、赤さび病発生時に散布

* F剤は赤かび病1回目か3回目に1度使用（継続検討中）



写真5 コムギ赤さび病発生程度の差（左：新防除体系、右：従来防除体系）

4 今後の課題と対応

- (1) コロナ禍での新たな問題発見と情報周知方法をより改善する。
- (2) 視察依頼など柔軟に対応し、他地域と情報交換を行う。
- (3) 新防除体系導入農家数の把握。
- (4) 広域的な情報共有。